

2 週間目

「替えのシートを持ってきたわよ。パジャマも着替えましょうね」

「ふふ、お姉ちゃんミルクだけの暮らしも二週間目。だいぶ素直になってきたわね♡」

「どうしたの、私の身体と自分の身体を見比べっこしたりして。あ、もしかして、身体が小さくなったことに気づいちゃったのかなあ？」

「背もだいぶ縮んで、可愛いいわよ。正義の味方さんをやってた頃の三分の二ぐらいかしら」

「ちっちゃな頃の面影がだいぶ出てきたみたい。なんでって、それは……お姉ちゃんは組織の怪人さんだもの。アナタの力を吸い取ってあげてるの。危ないことしちゃう大人の体より、戦う力なんてない小さな身体にした方が安心よね？」

「アナタはもう、どこにもいかないでいいの。どこかで危ない目に合う必要もないのよ、んふ♡」

「ほら、起きて」

「お姉ちゃんが抱っこして、よしよし撫でなでしてあげるね。小さくなったアナタなら、んしょつと、こうして横から抱いて、赤ちゃんみたいにあやしてあげちゃうよ」

「んふふ、お姉ちゃんのお膝の上で、抱っこして。ほら、ゆるらゆるら、ゆるらゆるら、お姉ちゃん揺り籠よお……昔を思い出すわ、こうしていつも、アナタのお世話してたのよ」

「でも、本当にちっちゃくなって、昔に戻ったみたい」

「ああ、かわいい♡ 私の弟くんが戻ってきた♡」

「いっぱい、ぎゅうう、してあげる。それで、アナタの正義の味方のエネルギーを沢山、吸い取ってあげる。もっともっとかわいくなるうね。頭の中まで要らないものは全部吸い取ってあげるんだから。アナタにはお姉ちゃんだけいいの。くふっ」

「このままお姉ちゃんの、んれるおお、なが〜いお舌で、身体中を舐めなめレロレロしてあげる♡」

「んふ、最初はあま〜いキスから」

「毎日しても飽きない、アナタも大好きなお姉ちゃんの唇、今日もいっぱい味あわせてあげる。ほら、唇がだんだん近づいていって。あ、んちゅ、ちゅっ、ちゅばちゅばッ、ちゅぶッ♡」

「はふう……もっ唇を擦りあわせて、ちゅぶちゅぶ、んちゅぶッ♡ そうよ、舌もいっぱい出して、ペロをれるお、れる、れるおッ。こうひて、いやらしく絡めたり、巻きついたりひて、ぢゅば、んちゅぶッ、ちゅぶちゅぶ、んちゅれる、れるッ、れるるッ♡」

「お姉ちゃんとエッチなペロちゅー♡ たっぷりと楽しみましょう。れるお、れるれる、れるる、んじゅる、ちゅれる♡ あふ……とっても美味しいでしょ？ とろけるように力が抜けてくの、もっともっと気持ちよくなってお姉ちゃんを受け入れて」

「んふふ、立派な正義の味方さんだったのに中身も小さな子供に、可愛いお姉ちゃんの弟くんになっていっちゃってるね。くすす」

「いいのよ、アナタにはお姉ちゃんがいればいいの。お姉ちゃんに全部まかせて、ね」

「このまま首筋を、ちゅ、んちゅ、キス、していくわね。んふふ、ビクって震えて、ぞくぞくしちゃってるところ、可愛い。んちゅぶ、ちゅちゅうう♡ キスマークもたっぷりつけてあげる♡」

「ちゅぽ、ちゅぽッ、んちゅぽッ、んちゅううッ♡」

「このまま、お耳も舐めてあげるわね。おねだりしなくても、お姉ちゃんには、弟くんのしてほしいこと全部、わかっちゃうのよお♡」

「まずは左のお耳から♡」

「外側から、んれろ、じゅるう、れろろ、れろおッ♡ んふふ、唾液たつぷりのペロで耳の入り組んだ隙間や、耳たぶまで んちゅ、ちゅぶ、んちゅッ、ちゅぽちゅぽッ、あふう……」

「じゃ、そのまま耳の孔も♡ お姉ちゃんの唾液たつぷりの舌先で……ちゅぽちゅぽッ、んちゅぽッ、ちゅぶちゅぶッ、んちゅぽッ……お姉ちゃんのおつゆを流しこんれえ、じゅる、んじゅる♡」

「んちゅぽッ、ぢゅぽぢゅぽッ、ぢゅぶじゅぽ、じゅぶぢゅぽッ♡ あふう……お耳、お姉ちゃんの唾でどろどろに、ふやけちゃった」

「右の耳も♡」

「体勢はそのまま。お姉ちゃんは怪人さんだから、このなが〜い舌で、舐めてあげられるの♡ 右のお耳の外側から♡ れろおお、れるれろッ、じゅる、れるれろろ、んじゅるッ♡ んちゅぶ、れろるッ、んれろれろお♡」

「もちろん、お汗たつぷりで、耳の外のヒダヒダも、耳たぶもたつぷり、ねっとりとお姉ちゃんがしゃぶってあげちゃう♪ ちゅぶ、ちゅぶぶッ、んちゅぽれろ、ちゅぶじゅぽッ♡」

「あふうう、もう声も出ないのかな」

「んふ、まだお耳の孔が残ってるわ、じゅる、んじゅるるッ♡ 舌にお姉ちゃんの蜜をいっぱい載せて、激しくペロでお耳を犯しちゃっ」

「じゅぼじゅぶ、じゅぼぼッ、ぢゅっッ、ぢゅぶぢゅぶッ、ぢゅぶッ、ぢゅぶ、ぢゅぼじゅぶ、ぢゅぶぢゅぶ、んぢゅぶぼッ♡」

「はふ、はふうう、両方のお耳を舌でおしゃぶりされて、ツユダクでれろれろされて、とっても気持ち良くなったでしょ？」

「このまま次は、乳首を舐めちゃうわね。左の乳首から、んれろ、れろろ、れろれろッ♡ くすす、先っぽおしゃぶりしただけで、もう乳首さんがおつきしてるわね。んふ、勃起乳首も、れろッ、んれろお、ちゅぶ、ちゅぶれろッ♡」

「右も舐めて欲しそうね。いいわよ♡ んれろおお、このまま舌を右の乳首這わせれえ」

「んれろ、れろれるッ、んじゅれる♡ んふ、こっちも乳首さん、おつきして、」

「まあ、両方の乳首をエッチに勃起させて、いいのよ、今のあなたはお姉ちゃんのかわいい弟くんなんだから、お姉ちゃんに感じさせられてあられもない声を上げるのも、欲望に身を任せて勃起が止まらなくなっちゃうのもあたりまえのことなの。だから、もっとエッチなところお姉ちゃんに見せて。ふふふ、まだちょっとだけ抵抗しちゃうなんて、要らない正義の味方のエネルギーはしっかり抜いてあげないとね。もっとなめなめして完全に溶けちゃうぐらいに気持ちよくしてあげる」

「あなたの身体に舌を這わせて」

「胸からお腹、そのまま股間へれろろ」

「おちんちんの脇を舐めて、太腿の間へ♡」

「んれろお、ここ♡ んふ、そうよ、お尻の穴よ。アナタの体なんだから汚いところなんて無いわよ。それに、ここをなめてあげるととってもいい声で鳴くの素敵よ。もつと、いっぱい舐めてほしいでしょ?」

「気持ちのいいことを我慢しないでいいの。全部、お姉ちゃんに任せて、お姉ちゃんの言うとおりに溶けちゃっていいんだよ。じゃあ、アナタのアナル処女、いただいちゃうわね」

「んちゅぶ、ちゅぶッ♡ くすす、今ビクってして、すっごく感じちゃってるわね。このまま肛門の中に、舌を潜らせれえ、んじゅぶぶぶ…：なが〜い舌をじゅぼじゅぼつれ、出し入れしちゃうわねえ、んちゅぶちゅぼ、すっごい蕩けたお顔、んふふ、素敵♡」

「身体をラクにして、アナタのアナルを浅くかき混ぜてあげる♡ 感じたら、ほら、エッチな声出してもいいのよ。弟くんがお姉ちゃんの前でアへ声あげるのは普通のことなのよ。ぢゅぶじゅぼッ、んちゅぶッ、ぢゅぶぢゅぶ♡」

「どんなにアナタが無様で、情けなくても、お姉ちゃんの大好きな弟くんだもの。全て受け入れてあげるから、じゅぼじゅぼ、じゅぶじゅぶ、んじゅぶぶッ♡」

「んふう、お尻の処女までお姉ちゃんに奪われちゃったね、でも、気持ちよかったですよ。その証拠に、おちんちんも、しっかりたっちできてるもんね」

「お姉ちゃんのペロで、肛門をずぼずぼされて、おちんちん勃起しちゃったのねえ、くすす♡ ね、素直に、うん、って言うってみて?」

「お尻の穴、お姉ちゃんの舌で混ぜまぜされて、気持ちよかったですよね? んふっ、よく言えたわね。えらいわあ♡ さっすが、お姉ちゃんの弟くんね」

「大人の体面も、正義の味方のプライドもなくなって、昔のアナタに戻ってきてるの、本当にうれしいわ♡」

「じゃあ、ご褒美に、勃起したおちんちんをラクにしてあげる。抱っこしたまま、腰を少しあげて、お口でほら啜えちゃうわよ」

「見て、だんだんお姉ちゃんの唇が、アナタのちっちゃな、可愛いおちんちんに近づいていっちゃう♡ くふふ、アナタのシヨタチンポを、お姉ちゃんがいただきま〜す♡ あむ♡ 唇をこうやつれ、ぎゅううっれ窄めて、ちゅばちゅば、先っぽを抜くね」

「んちゅぶ、ちゅぶちゅぶ、んちゅぶ♡」

「んふ、ほら、アナタも腰を動かしてお姉ちゃんのお口まんこの感触を楽しんれえ♡」

「じゅぶじゅぶ、じゅぶぶッ、んぢゅぶ♡」

「んううッ、お口の中で大きくなつれ、喉に当たって、んう、んぐぐう…ほら、良くなつたら出しているの、ちゅぶちゅぶ、んぢゅぶッ、ちゅぶぶッ♡ 出して、お姉ちゃんのおくひに、びゅっびゅっってお射精しましょうね♡」

「んぢゅううッ、んっぢゅうう、ぢゆるううッ♡ んっぢううーッ♡♡」

「んううッ、んぶぶッ…んぐぐ、熱いの、いっぱい出ひてえ…んふう…んく、んくんく、んくくッ♡ ぶはあ…ッ、お口の中に、ちゃ〜んとお射精できました♡ んふぶッ♡」

「お射精できて、エライエライのちゅ〜、してあげるわね。はい、んちゅッ♡ アナタは、お姉ちゃんの可愛い弟くんなんだから、お姉ちゃんのことを聞くのは当然のことなの♡」

「だから、お姉ちゃんのおっぱいを吸うのも、お姉ちゃんの手でいっぱい気持ちよくなつておちんちんから白いの出しちゃうのも問題ないのよお♡」

「ああ、もうほんとんど要らないもの出し切っちゃったのね。お姉ちゃんもとっても嬉しいわ。あと一息でアナタはお姉ちゃんだけいれればいい、お姉ちゃんにすべてを任せてくれる、純粋な弟くんになれるの。アナタの大好きな洗脳ミルクもいっぱい飲んでいいのよ」
「ぎゅ〜って抱き締めて、はい、お姉ちゃんのおっぱいですよお。先っぽを、んんッ、そうよ、お口に含んで、ちゅぽちゅぽ吸って…あ、ああ、そうよ、エライわね、おっぱい上手に吸えてるわねえ♡」

「そのまま、むにむにの柔らかい生パイ、ぎゅう〜って、お顔に押しつけちゃうわねえ。お胸の甘い香りも沢山、楽しんで♡ んふ、おちんちんもしっかりとおつき、出来てきたわね♡」

「じゃ、エライエライの手コキでシコシコしちゃうわよ、いっぱいいっぱいいせーしびゅっびゅして、いっぱいいっぱいお姉ちゃんのミルク飲んでいい子になろうね」

「何も心配することないのよ♡」

「ほ〜ら、シコシコびゅっびゅ、しようね♡ 指先がおちんちに絡んで、気持ちいいでしょ。おちんちんのエラ先をシコシコびゅっびゅ〜、シコシコびゅっびゅ〜♡」

「出して、出して♡ んふ、おっぱいちゅぽ吸いしながら♡ オチンポミルク♡ たくさん出して♡ ほらほらほら、カウパーを溢れさせて、たまたまもぎゅって引き攣ってるのよね」

「ほらあ、溜まったせーし、出しちゃえ♡」

「びゅっびゅっびゅ〜ッ♡ びゅっびゅっびゅ〜ッ♡」

「ああ、アナタのせーし、いっぱい出したのにこんなにどろっどろ♡」

「指にたっぷり白くて濃いのが絡んで、んちゅ♡舌に絡んで、とってもエッチなお味♡
もう頭の中、お姉ちゃんだけになってるのが分かるわよお」

「やっと素直になってくれたんだね。お姉ちゃん、うれしい♡」